

ど  
ん  
ぐ  
り  
と  
山  
猫

宮  
沢  
賢  
治



おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほで、けっこです。  
あした、めんどなさいばんしますから、おいで  
んなさい。とびどぐもたないでくなさい。

山ねこ 拝

こんなのです。字はまるでへたで、墨すみもがさがさして指につくくらいでした。けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそつと学校のかばんにしまつて、うちじゅうとんだりはねたりしました。

ね床どこにもぐつてからも、山猫の●●にやあとした顔や、そのめんどうだという裁判のけしきなどを考えて、おそくまでねむりませんでした。

けれども、一郎が眼めをさましたときは、もうすっかり明るくなっていました。おもてにでてみると、まわりの山は、みんなたつたいまできたばかりのようにうるうるもりあがつて、まっ青なそらのしたにならんでいました。一郎はいそいでごはんをたべて、ひとり谷川に沿ったこみちを、かみの方へのぼつて行きました。

すきとおった風がざあつと吹くと、栗くりの木はばらばらと実をおとしました。一郎は栗の木をみあげて、

「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかつたかい。」とききました。栗の木はちよつとせずかになつて、

「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ。」と答えました。

「東ならばくのいく方だねえ、おかしいな、とにかくもつといてみよう。栗の木ありがとう。」

栗の木はだまつてまた実をばらばらとおとしました。

一郎がすこし行きますと、そこはもう笛ふきの滝たきでした。笛ふきの滝というのは、まつ白な岩の崖がけのなかほどに、小さな穴があいていて、そこから水が笛のように鳴って飛び出し、すぐ滝になって、ごうごう谷さけにおちているのをいうのでした。

一郎は滝に向いて叫さけびました。

「おいおい、笛ふき、やまねこがここを通らなかつたかい。」  
滝がぴーぴー答えました。

「やまねこは、さつき、馬車で西の方へ飛んで行きましたよ。」

「おかしいな、西ならぼくのうちの方だ。けれども、まあも少し行ってみよう。ふえふき、ありがとう。」

滝はまたもとのように笛を吹きつづけました。

一郎がまたすこし行きますと、一本のぶなの木のしたに、たくさんの白いきのこが、どつてこどつてこどつてこと、変な楽隊をやっていました。

一郎はからだをかがめて、

「おい、きのこ、やまねこが、ここを通らなかつたかい。」  
とききました。するときは

「やまねこなら、けさはやく、馬車で南の方へ飛んで行きましたよ。」とこたえました。一郎は首をひねりました。

「みなみならあつちの山のなかだ。おかしいな。まあもすこし行ってみよう。きのこ、ありがとう。」

きのこはみんないそがしそうに、どつてこどつてこと、あのへんな楽隊をつづけました。

一郎はまたすこし行きました。すると一本のくるみの木の梢こずえを、栗鼠りすがぴよんととんでいました。一郎はすぐ手まねぎしてそれをとめて、

「おい、りす、やまねこがここを通らなかつたかい。」とたずねました。するとりすは、木の上から、額に手をかざして、一郎を見ながらこたえました。

「やまねこなら、けさまだくらいうちに馬車でみなみの方へ飛んで行きましたよ。」

「みなみへ行ったなんて、二ふたとここでそんなことを言うのはおかしいなあ。けれどもまあもすこし行ってみよう。りす、ありがとう。」りすはもう居ませんでした。ただくるみのいちばん上の

枝がゆれ、となりのぶなの葉がちらつとひかっただけでした。

一郎がすこし行きましたら、谷川にそつたみちは、もう細くなつて消えてしまいました。そして谷川の南の、まつ黒な榎の木かやの森の方へ、あたらしいちいさなみちがついていました。一郎はそのみちをのぼつて行きました。榎の枝はまつくろに重なりあつて、青ぞらは一きれも見えず、みちは大へん急な坂になりました。一郎が顔をまつかにして、汗あせをぽとぽとおとしながら、その坂をのぼりますと、にわかにはつと明るくなつて、眼がちくつとしました。そこはうつくしい黄金きんいろの草地で、草は風にざわざわ鳴り、まわりは立派なオリーブいろのかやの木のもりでかこまれてありました。

その草地のまん中に、せいの低いおかしな形の男が、膝ひざを曲げて手に革鞭かわむちをもつて、だまつてこつちをみていたのです。

一郎はだんだんそばへ行つて、びつくりして立ちどまつてしまいました。その男は、片眼で、見えない方の眼は、白くびくびくうごき、上着のような半纏はんでんのようなへんなものを着て、だいいち足が、ひどくまがつて山羊やぎのよう、ことにそのあしききときたら、ごはんをもるへらのかたちだったのです。一郎は氣味が悪かつたのですが、なるべく落ちついてたずねました。

「あなたは山猫をしりませんか。」

するとその男は、横眼で一郎の顔を見て、口をまげてにやつとわらつて言いました。

「山ねこさまはいますぐに、ここにもと戻つてお出でやるよ。おまえは一郎さんだな。」

一郎はぎよつとして、一あしうしろにさがつて、

「え、ぼく一郎です。けれども、どうしてそれを知ってますか。」

と言いました。するとその奇体きたいな男はいよいよにやにやしてしましました。

「そんだったら、はがき見だべ。」

「見ました。それで来たんです。」

「あのぶんしょうは、ずいぶん下手だべ。」と男は下をむいてかなしそうに言いました。一郎はきのどくになって、

「さあ、なかなか、ぶんしょうがうまいようでしたよ。」

と言いますと、男はよろこんで、息をはあはあして、耳のあたりまでまつ赤になり、きものえりをひろげて、風をからだに入れたがら、

「あの字もなかなかうまいか。」とききました。一郎は、おもわず笑いだしながら、へんじしました。

「うまいですね。五年生だつてあのくらいには書けないでしょ



当は、急にていねいなおじぎをしました。

一郎はおかしいとおもつて、ふりかえつて見ますと、そこに山猫が、黄いろな陣羽織じんぼおりのようなものを着て、緑いろの眼をまん円にして立っていました。やつぱり山猫の耳は、立って尖とがっているなど、一郎がおもいましたら、山ねこはびよこつとおじぎをしました。一郎もていねいに挨拶あいさつしました。

「いや、こんにちは、きのうははがきをありがとう。」

山猫はひげをぴんとひっぱつて、腹をつき出して言いました。

「こんにちは、よくいらつしやいました。じつはおとといから、めんどろなあらそいがおこつて、ちよつと裁判にこまりましたので、あなたのお考えを、うかがいたいとおもいましたのです。まあ、ゆつくり、おやすみください。じき、どんぐりどもがまいります。どうもまい年とし、この裁判でくるしみます。」山ねこ

は、ふところから、巻煙草まきたばこの箱はこを出して、じぶんが一本くわえ、「いかがですか。」と一郎に出しました。一郎はびつくりして、「いいえ。」と言いましたら、山ねこはおおようにわらって、「ふふん、まだお若いから、」と言いながら、マツチをしゅつと擦すって、わざと顔をしかめて、青いけむりをふうと吐はきました。山ねこの馬車別当は、気を付けの姿勢で、しゃんと立っています。したが、いかにも、たばこのほしいのをむりにこらえているらしく、なみだをぼろぼろこぼしました。

そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるような、音をききました。びつくりして屈かがんで見ますと、草のなかに、あつちにもこつちにも、黄金きんいろの円いものが、ぴかぴかひかっているのです。よくみると、みんなそれは赤いずぼんをはいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でも利きかないようでし

た。わあわあわあわあ、みんななにか云いっているのです。

「あ、来たな。蟻ありのようにやってくる。おい、さあ、早くベルを鳴らせ。今日はそこが日当りがいいから、そこのとこの草を刈かれ。」やまねこは巻たばこを投げすてて、大いそぎで馬車別当にいいつけました。馬車別当もたいへんあわてて、腰こしから大きな鎌かまをとりだして、ぎつくぎつくと、やまねこの前まへのとこの草を刈かりました。そこへ四方の草のなかから、どんぐりどもが、ぎらぎらひかつて、飛び出して、わあわあわあ言いしました。

馬車別当が、こんどは鈴すずをがらんがらんがらんと振りふりました。音はかやの森に、がらんがらんがらんとひびき、黄金きんのどんぐりどもは、すこししずかになりました。見ると山ねこは、もういつか、黒い長い縷しゆす子の服を着て、勿もつたい体らしく、どんぐりどもの前にすわっていました。まるで奈良ならのだいぶつさ

まにさんけいするみんなの絵のようだと一郎はおもいました。別当がこんどは、革鞭かわむちを二三べん、ひゆうぱちつ、ひゆう、ぱちつと鳴らしました。

空が青くすみわたり、どんぐりはぴかぴかしてじつにきれいでした。

「裁判ももう今日で三日目だぞ、いい加減になかなおりをしたらどうだ。」山ねこが、すこし心配そうに、それでもむりに威張いばつて言いますと、どんぐりどもは口々に叫びました。

「いえいえ、だめです、なんといつたつて頭のとがつてるのがいちばんえらいんです。そしてわたしがいちばんとがつています。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです。」

「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいからわたしがえらいんだよ。」

「そうでないよ。わたしのほうがよほど大きいと、きのうも判事さんがおつしやつたじゃないか。」

「だめだい、そんなこと。せいの高いのだよ。せいの高いことなんだよ。」

「押おしつこのえらいひとだよ。押しつこをしてきめるんだよ。」もうみんな、がやがやがや言って、なにがなんだか、まるで蜂はちの巣すをつつついたようで、わけがわからなくなりました。そこでやまねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんとかこころえる。しずまれ、しずまれ。」別当がむちをひゆうぱちつとならしましたのでどんぐりどもは、やつとしまりました。やまねこは、ぴんとひげをひねつ

て言いました。

「裁判ももうきょうで三日目だぞ。いい加減に仲なおりしたらどうだ。」

すると、もうどんぐりどもが、くちぐちに云いました。

「いえいえ、だめです。なんといったって、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。」

「そうでないよ。大きなことだよ。」がやがやがや、もうなにがなんだかわからなくなりました。山猫が叫びました。

「だまれ、やかましい。ここをなんと心得る。しずまれしずまれ。」

別当が、むちをひゅうぱちつと鳴らしました。山猫がひげをぴんとひねって言いました。

「裁判ももうきょうで三日目だぞ。いい加減になかなおりをしたらどうだ。」

「いえ、いえ、だめです。あたまのものが……。」「がやがやがやがや。」

山ねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんとこころえる。しずまれ、しずまれ。」  
別当が、むちをひゅうぱちつと鳴らし、どんぐりはみんなしずまりました。山猫が一郎にそつと申しました。

「このとおりです。どうしたらいいでしょう。」

一郎はわらってこたえました。

「そんなら、こう言いわたしたらいいでしょう。このなかでいちばんばかで、めちやくちやで、まるでなっていないようなのが、いちばんえらいとね。ぼくお説教できいたんです。」

山猫やまねこはなるほどというふうにならずいて、それからいかにも  
気取つて、襦子しゆすのきものの胸えりを開いて、黄いろの陣羽織をちよつ  
と出してどんぐりどもに申しわたしました。

「よろしい。しずかにしろ。申しわたした。このなかで、いち  
ばんえらくなくて、ばかで、めちやくちやで、てんでなつていな  
くて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。」  
どんぐりは、しいんとしてしまいました。それはそれはしい  
んとして、堅かたまつてしまいました。

そこで山猫は、黒い襦子の服をぬいで、額の汗あせをぬぐいなが  
ら、一郎の手をとりました。別当も大よろこびで、五六ぺん、鞭むち  
をひゆうぱちつ、ひゆうぱちつ、ひゆうひゆうぱちつと鳴らし  
ました。やまねこが言いました。

「どうもありがとうございました。これほどのひどい裁判を、

まるで一分半でかたづけしてくださいました。どうかこれからわたしの裁判所の、名誉判事めいよになつてください。これからも、葉書が行ったら、どうか来てくださいますか。そのたびにお礼はいたします。」

「承知しました。お礼なんかありませんよ。」

「いいえ、お礼はどうかとってください。わたしのじんかくにかかりますから。そしてこれからは、葉書にかねた一郎のと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございますか。」

一郎が「ええ、かまいません。」と申しますと、やまねこはまだなにか言いたそうに、しばらくひげをひねって、眼をぱちぱちさせていましたが、とうとう決心したらしく言い出しました。

「それから、はがきの文句ですが、これからは、用事みょうじこれありに付き、明日出頭すべしと書いてどうでしょう。」

一郎はわらつて言いました。

「さあ、なんだか変ですね。そいつだけはやめた方がいいでしょう。」

山猫は、どうも言いようがまずかった、いかにも残念だというふうに、しばらくひげをひねったまま、下を向いていましたが、やつとあきらめて言いました。

「それでは、文句はいままでのとおりにしましょう。そこで今日のお礼ですが、あなたは黄金きんのどんぐり一升しやうと、塩鮭しおざけのあたまと、どっちをおすきですか。」

「黄金のどんぐりがすきです。」

山猫は、鮭しやけの頭でなくて、まあよかったというように、口早に馬車別当に云いました。

「どんぐりを一升早くもつてこい。一升にたりなかつたら、めつ

きのどんぐりもまぜてこい。はやく。」

別当は、さっきのどんぐりをますに入れて、はかつて叫びました。

「ちようど一升あります。」

山ねこの陣羽織が風にばたばた鳴りました。そこで山ねこは、大きく延びあがつて、めをつぶつて、半分あくびをしながら言いました。

「よし、はやく馬車のしたくをしろ。」白い大きなきのこでこしらえた馬車が、ひっぱりだされました。そしてなんだかねずみいろの、おかしな形の馬がついています。

「さあ、おうちへお送りいたしましょう。」山猫が言いました。二人は馬車にのり別当は、どんぐりのますを馬車のなかに入れました。

ひゆう、ぱちつ。

馬車は草地をはなれました。木や藪やぶがけむりのようにぐらぐらゆれました。一郎は黄金きんのどんぐりを見、やまねこはとぼけたかおつきで、遠くをみていました。

馬車が進むにしたがつて、どんぐりはだんだん光がうすくなつて、まもなく馬車がとまったときは、あたりまえの茶いろのどんぐりに変わっていました。そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなつて、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持つて立っていました。それからあと、山ねこ拝やまねこというはがきは、もうきませんでした。やつぱり、出頭すべしと書いてもいいと言えはよかつたと、一郎はときどき思うのです。

どんぐりと山猫

どんぐりと山猫

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成 2）年 5 月 25 日発行

1997（平成 9）年 5 月 10 日 17 刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正 13）年 12 月 1 日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005 年 1 月 26 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。